

芦屋室内合奏団

第35回定期演奏会



神戸朝日ホール

2001年11月25日（日）

◎ごあいさつ

1965年、当時の神戸大学、甲南大学等の学生オーケストラの首席奏者達が芦屋市浜町の故橋本宗夫氏宅に集まり、以来36年間に亘って弦楽アンサンブルの活動を続けてまいりました。本年は新しい世紀に入ったこともあり、年初にはドイツを訪問し、あこがれのバンベルク交響楽団メンバーと共演致しました。また今回は管楽器の皆様のお支えもいただき、新たな曲に取り組む機会を得ました。

これからも皆様に愛される合奏団をめざしてアンサンブル活動を続けていく所存でございます。皆様のご声援に深く感謝致します。

2001年11月 芦屋室内合奏団 団長 青柳 良
団員 一同

プログラム

1. 芥川也寸志 「弦楽のための三楽章 トリプティーク」

I. *Allegro* II. *Berceuse : Andante* III. *Presto*

2. L.v.ベートーヴェン 「ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品19」

I. *Allegro con brio* II. *Adagio* III. *Rondo : Molto allegro*

ピアノ独奏 高田 寛子

🎶 休憩 (15分) 🎶

3. ドナルド L. アパート 「弦楽のためのエレジー」

4. W.A.モーツァルト 「交響曲 第40番 ト短調 K.550」

I. *Molto Allegro* II. *Andante*

III. *Menuetto : Allegretto* IV. *Allegro assai*

指揮 酒井 睦雄

◎本日の演奏曲目について

20世紀:

芥川也寸志 弦楽のための三楽章 (1953)

かつてのN響アワーの壇ふみの相手役として記憶されている方が多いかもしれない芥川也寸志(1925-89)の書いたショスタコーヴィチもどき。オスティナート(=しつこい反復)書法は好悪の分かれるところだろうし、いかにもまだ社会主義というものが夢を与えてくれていた時代の作品(最初の出版は「ソ連国立出版局」という感じだけれど、そもそもショスタコーヴィチと体制との関係からして実は微妙なものだったのだし、社会主義とい

う中身は別にして、夢のフォルムそのものは現在でも有効なのだから、やっぱりこれは今でも名曲なのである。芥川は社会と音楽を繋ぐことをつねに望んでいた。しかしGLAYを聴き携帯電話をもてあそぶいまどきの若年プロレタリアート(?)たちはこの曲をどんなふうで聴くのだろうか? 第2楽章のみが副題をもつが、これは娘のための「子守歌」だそうである。

ほとんど19世紀:

ベートーヴェン ピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 Op.19 (1795)

ボンというのは田舎町である。どれくらい田舎かという、まず自転車で快適に走れる。ライン河畔の道など実に気持ちいい。そして中心部から15分も自転車で走ると、馬に牽かされた荷車に農家のおじさんがのんびり乗っていたりするくらい田舎なのだ。まあヨーロッパの街の成り立ちからしてこの点はいずれも似たようなものなので、これをもってボンのイナカ性の証左とするのは公平を欠く。でもやっぱりボンは田舎である。ほんの10年ちょっと前までの40年ほどはたまたま西ドイツの首都だったが、首都になっちゃったりするはるか以前、ルートヴィヒくん(1770-1827)はその田舎町で生まれ育った。そのルートヴィヒくんが二十歳で大都会ウィーン(これもいまでは氣だてやさしい音楽ファンを中心とした観

光客に依存する立派なド田舎町だが)に出て、ピアニストとしてデビューしたときに弾いた自作の協奏曲がこれ。出版順から第2番となっているが、実はベートーヴェンの最初のピアノ協奏曲作品である。つまり田舎者の若書きだ。それでもれっきとしたベートーヴェンであることは聴けば分かる。(どちらかというともまだいかにも18世紀に属する作品であるのだけれど、今回のコンサートは18世紀から21世紀までお取り揃え! などといって喜んでいる私たちとしては、むりやり「ほとんど19世紀」ということになってしまう。)なお、本日演奏されるカデンツァは若きピアニスト・ベートーヴェンがデビューの際に弾いたものではなく、ヴィルヘルム・ケンプによるものである。

21世紀:

アパート エレジー 【世界初演】 (2001)

トロンボーン奏者として出発し、管弦楽指揮法でカンサス大学の博士号をとったドナルド・L・アパート氏(1953-)は、現在クラーク・カレッジ管弦楽団の音楽監督兼指揮者として、教育・指揮活動に力を入れている。当団コンサートマスターがアパート氏と縁があり、芦屋室内合奏団はこれまでに氏の作品「夢のように」"In the Similitude of a Dream"を1998年、「ガラスごしの翳」"Thru a Glass Darkly"を1999年に、いずれも日本初演している。今回の「エレジー」は芦屋室内合奏団のために新たに書かれたもので、本日の演奏が世界初演となる。今回の演奏にあたってアパート氏から寄せられたメッセージは次ページをご覧ください。

冒頭すぐにヴァイオリンに現れる旋律は、かつてアパート氏が書いたオルガンと合唱のための復活祭用の作品か

らとられており、そこでは「詩篇22」のテキストが付されていた。「詩篇22」は、十字架上のイエスの言葉を先取りするものとされる「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず、呻きも言葉も聞いてくださらないのか…」という言葉にはじまる。「エレジー」という曲全体を覆っている雰囲気は「悲歌」を意味するそのタイトルに集約されているが、この詩篇のテキストとも無関係ではないということになる。

なお、アパート氏について関心を持たれた方は、
http://artists.mp3s.com/artists/253/donald_l_apPERT.html
<http://www.geocities.com/~jsignorik/apPERT.html>
などをご参照いただきたい。

などをご参照いただきたい。

18世紀:

モーツァルト 交響曲第40番 ト短調 (1788)

モーツァルト(1756-91)の、いまさらコメントを書くのもどうかと思うような有名な曲、名曲である。小林秀雄の「疾駆する悲しみ」をはじめとして、さまざまな言葉におおいつくされている曲であってみれば、私たちとし

てはそれだけじかに音楽そのものと向き合いたくなっていく。なお、本日の演奏では、クラリネットの入らない第1稿を用いている。

(阿部卓也)

「エレジー初演にあたってのアパート氏からのメッセージ」

Elegy is dedicated to the Ashiya Chamber Orchestra. The enthusiasm of their musicians and their audience for my previous works (In the Similitude of a Dream and Thru a Glass Darkly) provided the inspiration needed to compose this new work. It has been approximately 12 years since I last wrote an original composition due to my busy schedule conducting and teaching. The urging of my good friends Yasuo and Naoko Torimaru caused me to write this piece. I am pleased and honored musicians that Maestro Sakai and his fine have taken the time to prepare the world premiere of Elegy. My only regret is that I am unable to be with you in person to share that experience. I will be with you in spirit. My hope is that you will be touched by what I have said musically because words are so inadequate. Thank you again for bringing my music to life and sharing it with the people of Kobe, Japan! I eagerly await the moment when I hear the recording of your concert.

(エレジー)は芦屋室内合奏団に献呈します。同団とその聴衆の方々が以前の私の2つの作品(「夢のように」と「ガラスごしの翳」)に対して示してくださった御好意が、この新作を書こうという気にさせてくれました。この12年ほど、指揮と教職に忙しく、作曲活動が出来なかったのですが、私の良き友人、鳥丸安雄・直子夫妻の熱心な勧めがこの作品を書くきっかけとなったのです。酒井先生と彼の優秀なプレーヤー達には〈エレジー〉世界初演のための練習に時間を割いて頂き、大変喜ばしく光栄に思います。ただ一つ残念なことは初演に立会ってその感動を分かち合うことができないことです。でも私の心はあなた方と共にあるでしょう。言葉では伝えられないがゆえに音楽で私が語ったことによって、あなた方の心が動かされますように。私の音楽に生命を吹き込み、それを神戸の方々と分かちあってくださいることに対して、改めて御礼申し上げます! あなた方のコンサートの録音を聴かせていただける時を心待ちにしております。(訳:阿部卓也)

◎ピアノ独奏 高田寛子

国立音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業。岡原慎也、拝田正機、長谷川香織、長谷川悟の各氏に師事。公開レッスンにて、リア・デ・バルベリー、パンチョ・ウラディゲロフ、ノーマン・シェトラ、迫昭嘉、クラウス・シルデの各氏の指導を受ける。1999年ウィーンにてインゴマー・ライナー教授のセミナーに参加。「期待される青少年コンサートオーディション」「ピアノ連盟オーディション」「中国ユースピアノコンクール」等にいずれも入賞。

2000年、2001年東京にて「ライン・カンマーアンサンブル」と共演。ソロ活動とともに室内楽の演奏にも積極的に活動し好評を得ている。現在、福山・府中に根拠地を移し演奏活動を続けている。

◎指揮者 酒井睦雄

桐朋学園高等学校音楽科を経て1971年桐朋学園大学卒業。指揮を斉藤秀雄、秋山和慶両氏に、クラリネットを北爪利世、二宮和子、F.フックス各氏に師事。71年より相愛オーケストラ指揮者、77年ザルツブルクにてO.スイトナー氏に師事。同年、東京にてS.チェリビダツケ氏のゼミナールに参加。2001年には芦屋室内合奏団を率いてニューイヤーコンサートをドイツ・バンベルク交響楽団団員とともに開催し好評を博す。現在、相愛大学教授として音楽専門家の育成にあたる傍ら、74年より芦屋室内合奏団音楽監督、岐阜交響楽団常任指揮者、90年より高知室内管弦楽団指揮者をつとめる等、アマチュア合奏団の発展にも尽力している。

◎芦屋室内合奏団

音楽監督	: 酒井睦雄	Vn:	鳥丸安雄	阿部卓也	播磨純一	福永千江子	三瓶政一
団長	: 青柳良		福永精一	青柳良	黒川美恵子	児玉七恵	藤本恭子
コンサートマスター	: 鳥丸安雄	Va:	河野建一	中田久仁子	大内隆一	竹村久美子	
マネージャー	: 福永精一	Vc:	鳥丸直子	宮崎晴夫	中井敏雄		
部長	: 中田和夫	CB:	中田和夫				

F1:小槇周一 Ob:栗崎宏憲, 金造ひかり Fg:遠藤克哉, 林美智子 Hr:福里美弥, 阿部陽子

次回演奏会お知らせ : 芦屋室内合奏団 春のパロックコンサート
2002年4月7日(日)13:00~ 西宮プレラホール(プレラにしのみや 5階)